

令和5年度第7回「知事と一緒に生き生きトーク」発言要旨

- 1 テーマ：地域とともにある学校づくり～新たな学校種 義務教育学校 旭学園の取組～
- 2 日時：令和6年1月24日（水） 14:00～15:10
- 3 場所：美咲町立旭学園 地域ふれあい室（久米郡美咲町西川 829-2）
- 4 参加者：美咲町立旭学園の校長、生徒及び学校の活動に御協力いただいている地域の方など6名

5 知事挨拶

- ・旭学園での取組は始まったばかりではあるが、取組の課題や見えてきたメリットなど、様々な話をお伺いできるのを楽しみにしている。

6 発言内容等

【自己紹介及び活動の状況など】

- ・子育て支援をしているNPO法人の代表理事で、美咲町統括的地域学校協働活動推進員をしている。

学校運営協議会と連動して地域と学校を結ぶ活動を広げるなど、美咲町の将来を担う子どもたちの成長を支えていくため、学校内での支援、放課後の時間を活用した支援、週末を活用した支援、家庭教育支援の4つの大きな分野で活動している。学校内での支援としては、より深い学びになるように、各学年の総合的な学習の時間に多くの地域の方が入り、子どもたちと新しい人材が出会える場づくりをしている。放課後支援としては、旭学園の地域ふれあい室を使用して、子どもたちの宿題を支援する「寺子屋あさひ」を開設して10年になる。宿題だけでなく、旭学園が英語特区に指定されていることから、小・中学生を対象として、英語検定の実施や受験のサポートをしている。

併せて、地域で英語のアウトプットができるように、県内の大学生や高校生と連携して、イングリッシュキャンプなどの学びの場づくりに取り組んでいる。

さらに、生涯にわたって取り組めるよう、卓球を通じた地域づくりとして、昨年6月には、幼稚園児から80代の方まで約100名が参加し、旭学園開校記念大会を開催した。来年度も年2回、旭学園を核として多世代の方が交流できる場づくりに取り組みたい。

- ・町内に13ある町づくり協議会の一つ、倭文西まちづくり協議会で代表をしている。人口600人弱、世帯数300弱、高齢化率が50%を超えており、この状況で人口を増やすことは難しいので、関係人口を増やそうとしている。子どもたちには、大学進学や就職で県外に出ても、生まれ育った地域を自慢するなど、いつまでも地元の応援団でいてほしい。そうした地元の思いを子どもたちに伝える機会を旭学園の校長先生がすぐに作ってくれている。

この地域では、旭学園の子どもたちが作ってくれた黄色い旗を各家庭で朝に出して夕方に取り込むという取組をしており、日中にこの旗が出ていない家庭がある場合には、お互いに声を掛け合うようにしている。

- ・土曜教育支援事業のびのびサタデー実行委員会の委員長をしている。平成14年度から学校と連動し、「スタッフ自身を楽しめない子どもたちも楽しくない」ということをモットーに、土曜日を利用して子どもたちの体験活動を行っている。地域の子どもを地域みんなで育てていこうという思いから、子どもと大人が交流する、様々な体験活動を行っており、主な活動として、ウォーキング大会、稲作体験、川遊び体験、1日消防士体験、キャンプ体験、ペットボトルロケット作成体験、星の観察会、子ども料理教室、スキー体験、スポーツ体験などを行っている。平成24年度からは、社会福祉協議会や防災士などと協働して、防災学習体験にも取り組んでいる。令和4年度からは、5年生と、稲作体験から生産物の商品化、生産地域のアピールなど、総合的な学習を地域貢献に広げていく活動にも参画している。
- ・旭みらいデザイン検討委員会の副委員長をしている。この委員会は、美咲町役場の旭総合支所の建て替えに当たり、旭地域の中心としてどのようなものがよいのか検討する会から始まった。旭地域から学校がなくなることは、地域にとってダメージが大きく、旭学園の開校は地域にとってとても大きな意味がある。私は子どもたちと直接関わることは少ないが、旭地域をどう活性化していくのか検討する中で、様々なことに携わる機会をいただいている。昨年までの4年間は、旧旭小学校のグラウンドで地域、商店、企業の方に御協力いただき、花火を打ち上げてきた。地域住民や子どもたちに約5000個のロウソクに火をつけていただき、キャンドルライトとして夜の幻想的な雰囲気を楽しむ活動も行った。過疎化が進む地域ではあるが、子どもたちの心に残るように種をまいているところであり、地域に思いを持ってくれる子どもたちを育てていく活動をしている。
- ・旭学園の児童生徒会長をしている。児童生徒会では、前期（1～4年）、中期（5～7年）、後期（8、9年）のステージごとに意見箱を設置して、悩んでいることや気になっていることを聞いている。
- ・旭学園の校長をしている。令和2年度に旧旭小学校の校長として赴任し、旭学園の開校準備に携わってきており、校長として4年目になる。旭学園は、学校を核とした地域づくりのシンボルとして取り組んでほしいと町長から言われた。地域で様々な活動をされている方がいるので、その活動に子どもたちが関わることができないかと考え、課題解決型学習の素材として、地域の方から思いや願いを聞いて、そこから解決したい課題を子どもたちが考え、取り組む学習スタイルに学校全体で取り組んでいる。

【旭学園の活動に関わる中で感じたメリットなど】

- ・旭学園になり、地域と連動して1年生から9年生まで積み上げながらカリキュラムを組んでいけるようになった。9年間を見据えて総合的な学習に取り組むことができることで、早い段階で先の学年での取組をイメージできる。学校運営協議会では、会議をするだけでなく、例えば、8年生、学校運営協議会の委員、地域の方とで一緒にワークショップを行い、そこで出たアイデアを自治会やNPO法人などに下ろして形にしていく活動ができている。これは、小・中学校が一緒になっており、教職員が積極的に力を貸してくださるからこそできている。

旭地域は誰かが突出して頑張っているのではなく、様々な方がうまく組み合わさる仕組みができており、旭学園ができたことで、その仕組みがより強固になった。

- 旭学園は全校の児童生徒数が100人ほどだが、100人だからこそできることがある。1学年1クラス10人という規模だから子どもたちの顔を覚えることもできる。町内には空き家が多く、旭地域だけで290箇所あるが、学校が授業を1時間割いて掃除に来てくれたり、掃除をしてきれいになった空き家で地域の思いを聞いてもらったり、子どもたちにこの空き家をどう活用したいかといった宿題を出す活動などもしている。旭学園に何回か行くことで、先生の顔も覚えて学校を近くに感じるようになり、できることは協力したいと思うようになった。

人口が少ないことによるメリットは生かした方が得であり、楽しんで取り組むことができている。

- 自分の子どもが小学校に入学して以来、のびのびサタデーの活動に参加しており、実行委員長をして3年になる。大人も楽しめて、子どもが家庭ではなかなか体験できないことをしっかり体験できる活動となるよう、地域や保護者の方に手伝ってもらっている。以前は、のびのびサタデーの活動の主な対象は小学生だったが、旭学園ができてから、中学生や旭保育園の園児にまで広がっている。

- 旭地域は過疎のモデル地域だと町長が時々言われる。これからさらに過疎に向かっていくのか、どうにか過疎を食い止めて現状を維持できるのかという岐路に立っており、孫たちが残りたいと思える地域にするためには旭学園は大事だと思う。

良い意味での過疎のモデル地域にしていきたいと思っており、行政に対してもバックアップしてほしいと伝えている。

子どもや老人にはサポートが手厚いが、子育て世代には目が届きづらい。旭地域は働く場所が少ないので、地方でも安心して子育てができる環境をつくるための活動を広げていきたい。町長は町民目線で発言してくれているので、私たちが旭地域にその思いを落とししていきたい。

- 8年生は総合的な学習の時間で、予算のことまで考えて、旭地域のためのどんなことをしたいか考えており、キャンピングカーを出したり、マルシェを開いたりすることを考えている。

旭地域は地域の人との関わりが深く、自分たちが考えたことを本気になって一緒に考えてくれる大人が多くいて、実際に実現に繋げてくれている。

- 旭地域は少子高齢化や過疎化を避けて通れないので、学校もそのことを受け止めながら子どもたちと学んでいかなければならない。フリーマーケットをして子どもたちだけが楽しもうということではなく、地域の皆さんに関わっていただくことで、子どもたちも楽しく地域の皆さんも楽しい、一緒に楽しめるイベントを考える学習に取り組んでいる。

多くの学校では、地域学習と言えば地域の良い所を紹介するような学習を行うが、旭学園では良い所だけでなく、過疎化地域が抱える課題に触れさせたり、子どもたちに地域の将来を自分事として考えさせたりしている。校区外からも通学したくなる学校を目指して、英語教育を保育園から行っており、旭学園に通うとしっかり英語に関わることができる。現在も校区外から通学する子どもがわずかにおり、これ

から増えていけば良いと考えている。

【地域と連携した学校づくりの取組を広げていくためのアイデアなど】

- ・教員は人事異動があり、地域外から赴任してくる方が多いので、教員が地域の方の願いをしっかりと聞いて取り組んでいくことが大切だと感じる。教員に対しては、旭学園は地域の子どもを育てる学校だということを年度初めに話をしている。
- ・自分の子どもが学校に通っていないと、ほとんど学校に来ないし、学校のことを知らない。私自身も、自分の子どもが学校を卒業してから何十年かは学校との関わりが全くなかったので、地域の方には、せめて学校の先生の名前と顔は覚えようという話から始めている。先生を知れば、その思いも分かり、こちらの思いも聞いてもらえ、学校を近くに感じることができる。学校の先生を知って子どもの顔を半分でも覚えたら、学校を見る目が違ってくる。学校と住民の間に立ってくれる方がいることが大きい。
- ・地域学校協働活動推進員が各地域にいるが、その人が自分の役割をどのように認識しているか、どれだけ学校の先生や地域の人と話ができるかによって違ってくる。私たちが良いと思う活動に子どもたちが参加するのではなく、子どもたちが発案したものを大人が受け止めて、それを基に大人が形を持って行くようにしている。こんな大人になりたいという姿を子どもにイメージさせることで、いずれまた旭地域に戻ってきてくれると考えている。
- ・地域の各集落で行われる餅つきなどには参加しているが、もっと地域の多くの人と関われる取組を児童生徒会で企画していきたい。
- ・旭学園を核とした旭地域を県民の皆さんにPRしてほしい。

【知事まとめ】

- ・みんなでそれぞれできることをやって、学校と地域が非常に良く関わっており、この取組の半分でも県内でできるようになれば、随分と景色や雰囲気は違ってくるのではないかと。
- ・皆さんの取組を参考にさせていただきながら、それぞれの地域でもできるようにしていきたい。